

にいがた

北から南から



白みそめた稜線

八木 三男

この文章は同じ会員制である「信州の教育と自治研究所」の『二〇周年記念誌』に寄稿した祝辞である。本「教育情報」に同研究所理事長山岸さんの「長野県知事選がもたらしたもの」が掲載されている。

(編集部)

創立二〇周年おめでとうございます。満八年を経過したいわば弟分の「にいがた県民教育研究所」として、会員だけを財政基盤とする研究所がいかに苦心の多いものか知悉していることもあり、心からの敬意と祝意を献じます。

* * * *

わたくしは二年前『まほろば』一五〇号に、知事が就任当初地方官僚によってあからさまな侮辱を受けた光景について感想を寄せたことがあった。丸山眞男を引用して、伝統的な官僚世界では公私のビュロクラシーの所属性による区別が「彼が何者であるか」ということの鮮明な指標になるといったあと、かつて「大日本帝国では、臣民の正業からはずれた」いかがわしさもあるとされた個人営業の文士とともに、最も伝統的な官僚にたいして、日本国家における世俗的な階層制のなかでいかなる地位も特権ももたない市民としての個人や小経営が結束して、意識的に闘いを挑むのがこれからの長野県政刷新運動の一つの側面になるのだろう、といった。

田中知事が圧勝した今度の選挙については、メディアの報道と『にいがたの教育情報』七二号に寄せられた信州の研究所理事長山岸堅磐さんの論考から得た知識しかないが、日本国家における世俗的な階層制のなかで一定の



位置を占める勢力のほとんどを敵にまわし、メディアがトゲのある報道を繰り返したなかでの勝利を感じをもって受け止めた。山岸論者のなかの「市民革命ともいえる勝利」という言葉と関連させて、フランス革命に影響を与えた『第三階級とはなにか』のアベ・シエイエス流にえば、信州の勝利はまさに特権あるいは利権をもたないすべての市民、個人や小経営の勝利ともいえるものだったのでしよう。

そんななかで、信州の研究所が「脱ダム宣言」に先行して運動を展開されたダム反対運動や自然環境保全のたたかいに改めて敬意を表します。なかでも「教育、自治、環境と総合的な立場に立ち、住民運動と科学をつなぎ、住民の立場からの解決を追求」（山岸稿）された信州の研究所の立場、とりわけ「住民運動と科学をつなぐ」ことの大切さを痛感します。わが研究所も「新潟県教育運動を教育学を含む諸科学の成果のうえに役立たせ」、日本の教育改革を地域から展望するという基

本的な方針をもっているからです。信州はわが研究所の先達です。

（やぎ みつお・にいがた県民教育研究所所長）

